# いざなぎ流 神秘の世界

神話と儀礼

【問い合わせ先】生涯学習振興課 ☎53・1082

山深く奥深い物部の里に、今なお残る神秘の世界。
いにしえの信仰の姿を、今に伝えるいざなぎ流の本質とは。

## いにしえから続く信仰の世界

いざなぎ流は、香美市物部に守り伝えられてきた極めて古い要素を含んだ民間信仰です。起源は定かでありませんが、平安末期ごろにさかのぼるのではないかと言われています。陰陽道や修験道、仏教、神道などが混合して成立したと考えられ、太夫により伝承され、現在に至っています。

いざなぎとは、いざなぎ流の起源を物語るいざなぎ祭文に登場するいざなぎ様に由来します。その祭文には、日本に生まれ、経文の修行を始めた占い上手の天中姫宮が、人を救うための祈祷（呪術）を求めて天竺に渡り、いざなぎ様から人形祈祷や弓祈祷などの祈祷法を習って日本に伝えた、ということが語られています。

いざなぎ流御祈祷は、昭和55年に国の重要無形民俗文化財に指定されています。

## 失われずに今日まで続いてきた奇跡

いざなぎ流と類似した信仰は、かつて日本中で行われてきたようです。しかし、それら各地の信仰は、今ではその多くが失われ、形骸化し、あるいは古い文書の中にしかその姿をとどめていません。

いざなぎ流の興味深いところは、そのような信仰世界が、かなり変形しながらも現在まで残っていること。そして何より、それが断片的なものではなく、ひとつの体系を持っているということです。

数百年という年月の中で、他の地域では同種の信仰がほとんど消え失せてしまったことを考えると、このことはまさに奇跡的なことだと思えます。

## いざなぎ流の宇宙　その深遠をのぞく

日本の宗教文化史をひもとく上で、極めて貴重ないざなぎ流は、どのように形づくられてきたのでしょうか。祭文や御幣、神楽など、さまざまな要素を併せ持つ信仰世界。それらの意味や物語の一端に触れると、宇宙のように果てしない世界がその先に広がっていると分かります。

さあ、深遠のふちに立ち、いざなぎ流の宇宙をのぞいてみましょう。



## 太夫

いざなぎ流のさまざまな知識を習得・管理している宗教者。いざなぎ流には、教祖や神社仏閣のようなものはなく、教団とか宗家といった組織もない。太夫は世襲制ではなく、太夫に弟子入りし、祭りに同行して手伝いをしながら、祈祷法や祭文の唱え方、御幣の切り方などの知識を学び、その知識をまた次の世代に伝授する形で継承される。

## 祭文

祭文は、神の由来や出来事の起源を語る物語のような文句で、祈祷や祭りの中で太夫によって唱えられる。基本的な祭文である『いざなぎ流七通りの祭文』のほか、鎮めに使う『天神祭文』、スソ（呪詛）儀礼に使う『呪詛祭文』、雨乞いには『枕木祭文』、病人祈祷のときは『天下正』と、目的に応じてさまざまな種類の祭文がある。

## 御幣

水神めんたつの幣

いざなぎ流には200種類以上の御幣が伝承されている。御幣は神々や精霊が宿るものとして、和紙を切って作られる。それらは驚くほど表現力に富み、神秘的で、独特の美しさを備えている。祭儀に応じて、山の神、水神、荒神、おんざき、八幡、恵比寿、おん竜、めん竜といった数々の神格が切り分けられ、飾り立てられる。

## 舞神楽

いざなぎ流祈祷は、祭文を唱えながら舞を舞うことが特徴。座したまま唱えごとをすることを『神楽』、たち舞う所作を『舞神楽』という。「畳半畳分で舞うべし」という口伝があり、狭い座敷で儀式を行うことが多く、コンパクトな所作の舞になったと考えられる。五色の笠を被り、扇やたすき、太刀などを手に、太鼓に合わせて舞う。

## 面

大面（永禄10〈1567〉年）県立歴史民俗資料館 蔵

家や集落に伝えられてきた面。詳細は明らかでないが、十二面でワンセットであることが多い。12という数はいざなぎ流にとって重要な意味を持つ。面によってさまざまな性格・役割があり、儀式の中でも使われる。「面を作るときは絶対に人に知られてはならない」と言われ、山にこもって自分で面を彫り、太夫が魂を入れたという。